

〈紗幕〉を通しての愛の探求

——エドワード・ハーシュの連作詩

森 田 孟

イリノイ州のシカゴ生れで、三十歳そこそこに出した最初の詩集『夢遊病者のために』*For the Sleepwalker* (1981)で注目されたエドワード・ハーシュ (Edward Hirsch, 1950-) も、今や六十四歳になった。これまでに公刊した

詩集八冊^{ほか}他、驚異のベストセラーとなった『詩を読んで詩なるものが大好きになる方法』*How to Read a Poem and Fall in Love with Poetry* (1999) などの散文著述や編著を次々に出して旺盛な活動を続けてきた。「ワシントン・ポスト

書物の世界」(*The Washington Post Book World*) の毎週の「詩人の選択」"Poet's Choice" 欄を担当 (2002-5) したこともあり、十指に余る種々の賞を受けた。

ヒューストン大学の創作科で十七年間教えた後、一九二

五年設立の「ジョン・サイモン・グッゲンハイム記念財団」の四代目の会長職に就いた。

この詩人の作品を本稿は取り上げる。

まず、『アメリカ最優秀詩選集』*The Best American Poetry* (Scribner Poetry) の二〇〇三年版 (pp.87-91) に選出された七篇の詩の連作 (「パリ評論」*The Paris Review* 初出) である。

願望手稿 *The Desire Manuscripts*

一、渴望 *THE CRAVING*

『オデュッセイア』巻十二

私は警告が必要だった。あの女神⁽¹⁾

と 一群の部下たちから 私を帆柱に手足もろとも縛りつけるようにという、そうすれば耳を澄ませられるだろから

二人のセイレーン⁽²⁾の膨らんでゆく、陽に炙られた命取りの声々が 取り憑かれた音を織り上げながら 沸き返る寄せ波を覆って私を下へと呼び寄せけるのに、その間私は 綱で縛られたまま願望の余り身を振って 嘆願したのだった 解いてくれ、放してくれ、解き放つてくれと。

どれ程いそいそと私が身を任せていたことか
あの激情に、あの溺れさせんとする青い魅力に、
その間 どうしようもなくなった雲が頭上を疾走し
耳の聴こえなくなった漕ぎ手たちは無慈悲にも故郷へと漕ぎまくった。

私は救われたのだ と分っている。しかし何年も経った今
でさえ、

私はあの声々を 眠って夢みながら渴望するのだ。

訳注

(1) the goddess 太陽神ヘリオスの娘、魔女キルケー (Circe)、アエアエア島に住んだと言われる「世にも麗しき女神」「人語を話す怖るべき神」「髪美しきキルケー」。
(2) Sirens シシリー島近くの小島に住む上半身女、下半身鳥の姿をした海の精で、美声によって島の近くを通る船人を誘惑し、難破させたと言われる。

難所を切り抜けて帰国できると、キルケーがオデュッセウスに種々助言を与えてくれる話柄への言及で、オデュッセウスの語る十四行詩(押韻無し)の体裁の作品。最終行に言う〈渴望〉こそ、詩の発生の、詩人誕生の、原点ではないかと、この詩は示唆するのではあるまいか。

次はその続きの詩化作品。同じ十四行詩だが、四行ずつ三連に二行一連から成る構成。

二、歓喜 THE RAVISHMENT

『オデュッセイア』巻十二

私は耳を澄した あの女神なら私の心を魅了できるだろう
昼の支配者 うっとりさせる日光を 向こうに退けて、
それで私は傷つくことなく国中を旅して回った

スキュラとカリュプデイスのうろつく海峡へ向かつて、

しかし私は不用意にもセイレーンがぶらついているとは思
わなかった

汚い部屋の寝台で、それも居酒屋の上の、
そこでは人足たちが、酸っぱい赤ワインをがぶ飲みし
夜晩くまでカード遊びをしているのだった。

永遠を巡行するのに一瞬間しかかからない

私は急いで着替えをして、二十分後に出かけた、
自分のお金を持って。私は船に戻り

尋常の部下たちは急ぎ故郷へと向かった、

しかし、愛は、私の大部分なのだが、決して去らなかつた
クローヴァーで塩気の薄れたあの暗い緑の浜辺を。⁽³⁾

訳注

(1) Scylla キルケーによって海の怪物に変えられたニンフ。
船がカリュプデイスの渦巻を避けて近づくと、船員を取っ
て食べた。後世、スキュラ岩(イタリア南岸メッシーナ

海峡に突き出た岩)と同一視された。

(2) Charybdis イタリア、シシリー島北東沖にあるメッ

シーナ海峡の渦巻の擬人化。このギリシャ神話の固有名
詞からの成句、"between Scylla and Charybdis"「両極に
挟まれて」「進退窮まらぬ」「前門の虎、後門の狼」

"fall from Scylla to Charybdis"「一難去つてまた一難に
遭う」

(3) that dark green shore sweetened with clover 陽の神の
飼う多数の牛と羊が草を食んでいるトリーナキエー
(Thrinakia)の島の浜辺。

三、女神の為し得ること

WHAT THE GODDESS CAN DO

『オデュッセイア』巻十

おそらく彼女らしく顔を上げたのだった

あるいは声を、余りにも高かったのだが、あるいは彼女の
編んだ髪を、

そのせいで私は 知り合いの女性を思い出した、

しかし私は或る神のように 丈高い椅子に座つて
ワイン入りの蜂蜜を一杯飲み

うとうとしながら自らの幸運を教え上げていた、

それで彼女に豚(1)に変えられた私は

団栗を求めてキーキー啼き、ブーブー唸り、毛を逆立てながら

豚小屋に居て、他の豚(2)とも共に地面を鼻で掘った。

その後、我らの指揮官(3)が彼女を説得してその魔法を取り消してもらい、我らは動物の躰(かた)から解放されて……

私はこの生涯で多くのものになってきた——

夫、戦士、予言者——しかし忘れることは出来ない

女神がしようと思えば、私に対して何を為し得るかを。

訳注

(1) she キルケー。「私」は九歳の豚の姿にされた。

(2) swine 二行上の 'pig' とは違う。旧世界のイノシシ

科 Suidae のイノシシ (wild boar) が飼育されたもの。四

行前の「ワイン (wine)」と押韻するが、この詩そのものは、前二作同様押韻しない。

(3) leader オデュッセウス。

『オデュッセイア』第十歌（巻十）は、風の神アイオロスの島に漂着して一か月歓待された後、オデュッセウスは、帰国の途につくものの、部下の不始末によって帰国寸前に逆戻りとなり、再度の航行での受難後、魔法を使う女神キルケーの島に着く。そこでの危難がこの作品での話柄である。オデュッセウスの部下の一人に〈同化〉したこの作品の語り手「私」の想いが、形象化されている。十四行詩だが、三行三連と二行の一連に三行の一連で締め括る構成になっている。

四、宣告 THE SENTENCE

『地獄篇』第五歌

君が昨夜 第五歌を声高く朗誦した時

君の裸のままの一本調子の碎けたイタリヤ語に

私は甘やかに どうしようもなく肉欲をそそられてしまい

思ったのだよ 我らは到底許されないだろうと

お互いの肉体と魂とを食り合ったことを、

それでそのうち 罪の目利きミーノースが(1)

従者の辺りへ二度怒鳴って

永遠に動き続けるという終身刑を宣告して

我らを下方へ 第二の社会へと 注ぎ込むことになるう

そこでは我らは二度と再び眠れないし休めもせず

荒れ狂う空中で揉まれ、他の不本意な

恋人たち同様 理不尽な情熱を抱くことにならう、

が それでも私は 君から離れられないのだよ、我が尻軽

女さん、

我らの天国は常に我らの地獄とならう、卒倒だ。

訳注

- (1) Minos クレーテー島の王。ゼウスとエウローペーの息子でパーシパエーの夫。アンドロゲオースの父。ダイダロスに迷宮の建造を命じた。死後、黄泉の国で判官となった。

『神曲』地獄篇第五歌は、ダンテが入ってゆく第二の「園谷」が話柄で、罪業の判定者ミーノースが待ち構えているところで彼が出逢うのは、「愛ゆえに現世を逐われた」

歴史上の著名人たち——アッシリアの伝説の女帝セミラミス、カルタゴの伝説上の創設者・女王のディードー（彼女は夫の死後その地に漂流してきたアエネアースを恋したが、彼が去った後自殺した）、エジプト王の娘クレオパトラ（父の死後その兄弟の妃となり、後にカエサルに独裁者にしてもらい、その子を生む。カエサルが暗殺された後はその仇を討ったアントニウスと愛し合うが、彼がオクタウィアヌスに敗北するや自殺した）、トロイア戦争の原因となったあのスパルタ王の妃ヘレナ、中世の騎士の恋愛の代表者トリスタン、『神曲』の中で最も有名な一対フランチェスコとパオロなどである。

「宣告」は、一文から成る「全体でピリオドが最後に一つだけ」の文「テルツァ・リーマ」(terza rima, 三韻句法)の詩型のソネットになっている。この三韻句法詩型とは、イタリア詩の短長律 (iambic verse) の一形式で、一行十一音節の三行連句 (tercet) から成り、押韻形式は、a b a、b c b、c d c、…と続いてゆく。ダンテの『神曲』の主要形式であった。それが、「宣告」では用いられている。擬似韻が多いが、各行末語を示せば、night, Italian, appetite/forgiven, soul, sin/tail, motion, circle/again, il-

bogotten, reason/wanton, swoon, で a b a, b c b, c d c,
d e d, e e' のつもりである。

五、悲嘆の野 THE MOURNING FIELDS

『アエネーイス』第六卷

下の世界は星一つなく 全く深々としており
君が私のそばに横たわっていて 私の黄金の枝が⁽¹⁾
眠りの影立った沼地に落ち込んだ時、

私は地獄の領域について読んでいた、どのようにして
一人の兵士が⁽²⁾〈デイスの家〉⁽³⁾に突進していったかを
それでも彼は尚も生きており、永遠の法を破ったのも

敢然と立ち向かってであった 死の王国に、広大な深淵に、
霧に沈んだ地面——不気味な、ぐらぐら不安定な——に、
そこを護っていたのは狂った獣、喉の三つあるケルペロス。⁽⁵⁾

今晚私は我々——沈み込み望みのなくなった——について

読んでいる

〈悲嘆の野〉⁽⁶⁾と銀梅花の⁽⁷⁾小森の中を、

別々の小径を彷徨っている 闇の中を迷い子になりながら。
そこには書かれている 我らは愛の掬^{とび}になったのだと、
(1) 地上で、無慈悲な上の世界で。

訳注

(1) my golden bough このソネット作詩の切っ掛けになつたこと、『アエネーイス』第六卷を読むことになった動機、の象徴だろうが、あの古典では、地下の世界に入るために必要な〈黄葉の枝〉で、母親が送ってくれた鳩によってその在り処を教えられる。

(2) a soldier アエネーアース (Aeneas)。

(3) House of Dis 冥府の神、地下界の王プルートの宮殿、冥界、黄泉の国。

(4) an eternal law 一度地下世界へ入ったら二度と地上へは戻れない、という法。

(5) Cerberus 冥府の門を守る、頭が三つの貪食の犬。現世で大食の罪を犯した者を食い殺して罰する。

(6) the Mourning Fields アエネーアースが地下に入ってから初に出逢う野。愛の容赦ない扱いで身を亡ぼした者たちがいる。

(7) myrtle フトモモ科ギンバイカ属の常緑低木、南ヨーロッパ産、芳香の白い花をつける。葉や果実に芳香があ

るところから古くはウィーナスの神木とされ、愛の象徴として結婚式の花輪に用いられる。花言葉は「愛」(Love)。

ローマ建国の叙事詩であるウエルギリウスの『アエネーイス』(Virgil's *The Aeneid*)の第六巻は、アエネーアースが父親に会いに地下界へ入る話。この英雄を地下界へ案内するのは、アポローン神の巫女シビュラで、彼女が蜂蜜と睡眠薬を麦粉に混ぜた団子を冥府の番犬ケルベロスに与えて眠らせる。この冥府でアエネーアースは、父から、後のローマの成り行きを予言され、建国に乗り出すことになる。

彼が最初に出逢う〈悲嘆の野〉での亡霊たちは、いずれも愛の厳しい扱いで身を亡ぼした者で、義理の息子に恋慕して拒絶された挙句自殺した、テーセウスの妻バエドラー。夫ケバルムに嫉妬してその動静を密かに窺っているうちに夫に誤殺されたプロクリス。誘惑されて夫を無理やりテーパーの戦いに送り出して死なせ、自らは義理の息子アンピオンに殺されたエリピュラー。テーパー七勇士の一人であった夫を失い、その火葬時に自らも死んだエウアドネー。ミーノース王の妃で牛を愛してその子である怪物

ミーノタウロスを産むパーシパーエー。死んだ夫が許されて地下の国より地上に帰され、一とき共に過ごした後地下に帰ったのを追って自死したラーオダミア。ポセイドーン「ネプトゥヌス」に愛されて男になり、不死身となってケンタウロスとも勇敢に戦ったが、後に再び女に戻ったカエネウス。かつてアエネーアースが関わって不幸にし、そのため憎しみを抱かれるフェニキアのデイドー。これら錚錚たる！人々の影に出逢う〈悲嘆の野〉の箇所が、特に詩人ハーシユに感銘を与えたのだろう、この叙事詩の前半で最も長いこの巻で、ここだけを取り上げている。

「悲嘆の野」は、三文「全体でピリオドが三箇」の三韻句法ソネットで、各行末語を見てみると、*deep, bough, sleep/how, Dis, law/abyss, treacherous, Cerberus/hopeless, grove, darkness/love, above/*、ほぼ正確に、*a b a, b c b, c d c, d e d, e e* の押韻構成になっており、第一行冒頭の「下の世界」「The world below」は、最終行最後の語句「上の世界」「world above」と呼応して締め括られる。

六、オルペウスのあらゆる魔術の後あとで

AFTER ALL THE ORPHIC ENCHANTMENTS

『転身譜』卷第十及び第十一

オルペウスのあらゆる魔術の後で、全てが
言われ行われた後で、第二の死(1)が彼の妻に

衝撃を与えて ぶるぶる戦おのく雲と

幻影の姿、もや曇る更に低い奥底を要求させた後で、

彼がカローン(2)に第二の機会を懇願したのに

退けられて地上で追いかけられた後で

そこでは彼は女性たちをたつぷり三年間避けて

自分自身のために若者たちと共に命に刻み目を入れたのだ

ったが、

菜食主義者の司祭がいて 自分たちの背信の

埋め合せをする恋人たち——ケラストア(3)、

プロポエティデス(4)、ピュグマリオン(5)、

ミユラとキニユラス(6)、ウエヌスとアドーニス(7)——の情熱を

復唱したのだが

全てが閉ざされ、完結し、

費用が勘定された後で、彼が歌って

ヒヤシンス(9)と純潔な月桂樹(10)を讃え

獣たちの涎たらたらの魂を魅了した後で、

彼がトラークア(11)の女性たちを激怒させたため

猛禽に取り囲まれて、神々の予言どおり

ばらばらに切り裂かれた後で、

彼の亡骸が地面を血でびしょ濡れにし

流れが彼の切断された頭を運びながら歌となって

下流では呪文でうっとりさせる悲痛甚だしいので

木々が青葉の王冠を噴出し 石また石が跳ね

飛び 膨れ上った河々が各々の河床で噎び泣いた後で、

私は訝かるのだ(12) オルペウスは既に心に決めていたのでは

ないかと

結局はそうする値打ちがあったのだと、自分の亡骸を断念

すれば

下方の世界へ自分は戻れそうだし
その世界は諳んじているのだから、そこを　そうあって欲しいが、

彼はエウリュディケー⁽¹³⁾と共に向う側へと移ってゆくのだ、
ある死霊^{シイダ}が別の死霊たちの真中でまだ歌っている間に、
時々彼女の背後を歩きながら、時には前方へ向かって、
そしてくるりと回っては　彼女を凝視め続けながら　いつまでも。

訳注

- (1) a second death 永遠の死。肉体の死を第一の死とし、その死後の裁きで不信心者の魂が地獄に落ちること。
「ヨハネの黙示録」21・8「臆病な者、不信仰な者、忌わしい者、人を殺す者、淫らな行いをする者、魔術を使う者、偶像を拜む者、全て嘘を言う者、このような者たちへの報いは、火と硫黄の燃える池である。それが、第一の死である」。
- (2) Charon 死者の魂を船に乗せて冥土の川ステュクス(Styx)「三途の川」を渡すとされる渡し守。長い髯と見窄らしい衣服の老人の姿で表された。
- (3) Cerastes 「角のある者たち」の意。キュプロス島の伝説上の原住民。尚、アフリカ北部、アジア西部の砂漠に生息する小型毒蛇、ヨコバイクサリヘビも指す。
- (4) Propoetides キュプロス島の少女たちでウエヌス「アプロディーテー」崇拜を拒絶した廉で淫らな性格を付与されて最初の娼婦となり、後に石に変えられたアマトウース市(Anathus)の乙女たち。
- (5) Pnygallon 彫刻の名手、キュプロスの王。自作の象牙の乙女像を恋したが、彼の祈りに応えて女神のアプロディーテーがこれに生命を与えた。
- (6) Myrtha and Cinyras ミュラ(スミュルナ [Smyrna] ともいう)はキュプロス島の王キュニラスの娘。父親と通じたため神々により没薬の木(myrrh tree)に変えられた。
- (7) Venus 古代イタリアの庭園と春の女神。ローマ人はこれをギリシヤ神話のアプロディーテーと同一視して、愛と美の女神とした。
- (8) Adonis 女神アプロディーテーの愛を受けた美青年。ペルセポネー「次の詩「悔恨」の訳注(1)参照」にも愛され、彼女と共に下界で毎年四か月、他に自分の好きな所で四か月過ごすことをゼウスに許された。
- (9) hyacinths 美少年ヒュアキントゥス(Hyacinthus)——誤ってアポローンの投げた円盤に当って死んだ——の血

から生じたと伝えられる、ユリ科ヒアシンヌ属の球根植物、アイリス、グラジオラス、ヒエンソウ等。

- (10) *Laurels* 月桂樹のギリシヤ名はダフネー (*Daphne*) で、テッサリアを貫流する大河ペーネイオスの河神の娘ダフネーは、アポロン神の求愛を拒絶して月桂樹に変身した。「純潔な」の形容詞が在る所以である。

- (11) *Thrace* バルカン半島東部の古代の地域。時代によって範圍は著しく異なる。後にローマ帝国の属州となり、現在ブルガリア、トルコ、ギリシヤ領に含まれる。

- (12) *I wonder if* 「〜の後」¹“after”が八回反復された後、「私は訝がる」。

- (13) *Eurydice* オルベウスの妻、木の精のニンフ。

オウイディウス (*Ovid, 43B.C.-AD.17?*) の『転身譜』 *The Metamorphoses* 卷十及び卷十一は、オルベウスとエウリュエダイケー、花になったヒュアキントス、春を売るプロポエティデス、ケラストエ、象牙の人形に恋したピュグマリオン、没薬の木に変身したミュラ、アドーニス²の誕生、そして、オルベウスの死が扱われている。その英詩化が四行詩八連三二行の「オルベウスのあらゆる魔術の後で」に結晶したものである。

七、悔恨 THE REGRET

紛失したオルベウス神話

もし我らが結婚していなかったら、もし君が散策などしなかったら、

なにしろ 跳で丈高い草の中で毒蛇に噛まれて

君は孤りで泣きながら地下の世界に送り込まれ

他の死霊の仲間入りをしたのも、彼ら入りたての新たな新参者たちは

いつ何どきでも到達するのだし、永遠なる途中駅に

ベルセポネーの、中身のない領域、〈死の家〉に、

また もし私が、私ならステュクス川の霧の中に入っている

神に希って我らが、ここで今、上の世界で

互いを強奪せんばかりに必要としていることを説得できた

だろうから、

陰深い小径を全く沈黙したまま

アウエルヌスの虚空、大地の縁を

よろめき歩む私の妻を求めて振り返ったりしなかったら

それだったら私は漂っていることはなかったかも知れない
ここを孤りで、悲しみ悼む丘の中腹で、陰もない所で、
運命に愛された青年たちを褒めそやして

近づいてくる木々へ、輝くロートスへ⁽³⁾

深い淵を愛する人へ、更にほろ苦いハシバミへ、

川に取り憑かれたヤナギとナナカマドへと向かわせながら

私自身の死を待ちながら、それだったら発狂した復讐の

三女神は⁽⁴⁾ 私の頭と私の豎琴^{リッラ}を下流へ送り出しながら

今尚我らについて歌っていることだろう、あったかも知れ
なかつたことを。

訳注

- (1) Persephone ゼウスとデメーター^(Demeter)「ケ
レス (Ceres)」の娘。冥府の王ハーデース (Hades) に
さらわれて女王となったが、ゼウスの仲立ちにより、年
の一期間地上に帰ることを許された。

- (2) Avernus オルベウスは冥界から帰る時ここから地上に
出るし『転身譜』巻十、五一行)、後、アエネーアース
もここから地下界へ降りていった(同、巻十四、一〇五
行)。冥界そのものを指す。

クマエ(イタリアのカンパニア地方の海岸部の町、ナポ
リの近く)の近郊にある火口湖で、その水から発する悪
臭のために湖上を飛ぶ鳥が死んだとされ、冥府の入口と
信じられてきた。

- (3) Iolus その実を食べると夢心地の忘却状態になるとされ
た想像上の植物。ナツメの木か楡の木であろうとされて
いる。

- (4) Furies フリアエ「エリーニユース (Erinyes)」たち三
人姉妹、ガイア (Gaia) の娘。通例、翼を持ち、頭髮は
蛇、手に松明を掲げて罪人を追い、狂わせたという。最
初姉妹の数に限りはなかつたが後に、アレククトー、メ
ガイラ、ティーンシポネー (Alecto, Megaira, Tisiphone) の
三人に限定された。

以上、七篇詩の連作「願望手稿」には、作者自身の言葉
がある(その、二〇〇三年版二〇七ページ)ので、それを見
ておこう。

その標題に緊張を感じていると彼は言う。「願望」は

我々を一方に、〈手稿〉は別の方向へ連れてゆく。どの詩——初めの五篇はソネット——にあっても、愛する人が古典のテクストの紗幕を通して、その恋人へ語りかけるのである。そのせいで私は、詩における鍵となる瞬間と、私にとって重大な意味を担ってきた基本の書物と、出逢うことになって、私自身の情熱を探求することが可能になった。例えば「宣告」ではダンテの『地獄篇』の第五歌が寢室に持ち込まれている。「悲嘆の野」では、恋人が傍で眠っている間に話し手に憑き纏うのは、ウエルギリウスの『アエネーイス』の巻六である。

これらの大半は地下の世界の詩である。最後の二篇は、各々長い一文「全体でピリオド一つ（訳詩では「。」一つ）だけの文」の作品で、オルペウスの話に言及しており、それは結局、**原形詩**の物語である。オルペウスのテクストの全部は我々には失われているので、最後の詩で私はそれら喪失の〈オルペウス神話〉*The Lost Orphics*の一つを創出して根底の物語を語り、喪失と後悔の痛恨さを創造してみようとした」と雄弁な〈自注〉を公表している。

彼の結語は、「この願望の連作の前提は、偉大な詩は我々を解放して我々自身にしてくれるのだ、というもので

ある。偉大な詩は、我々を読んでもくれるのだ（They read us）。名言であろう。偉大な詩を読むことで読者は自身に目覚めるのであり、偉大な詩は、読者に本来の自身を自覚させてくれるもの、自分自身を新たに発見させ、延いては新たな自分自身を創造させるものなのである。

ハーシユは、実にさり気なく、「紗幕^{スクリーン}（the scrim）を通して」と語ったが、〈紗幕〉とは、演劇で用いるもので、「背景の幕、ないし、壁のようにみえ、裏側に照明を入れる」と半透明に透けて見える織物」のことである。

古典、先人の、テクスト、その世界の〈紗幕〉を通しての新たな発見、創造を实践した作品を、ハーシユはその五年前にも発表していた。同じく「バリ評論」誌初出で、『アメリカ最優秀詩選集』の一九九八年版（pp.153-153）に選ばれた、やはり七篇の詩の連作である。

愛に関する講義集 *The Lectures on Love*

一、シャルル・ボードレー

これから講義が始められるのは大きな喜びなので、

聴講の皆さんに感謝します。私の主題は愛であり私の述べることは簡単なもので、性愛エロティックラブです、

それが、結局、喜びの決定的な形であり、そっくり似ています 外科手術、あるいは拷問に。

皮肉とか冷笑に聞こえるなら お許しあれ

しかしきつと皆さん同意してくれるでしょう、冷笑は時々求められるものです 拷問について議論する際には。

第一幕、第一場、出発点は「愛」、歌劇に表れる激しい情熱の舞台です。

初めのうち愛し合う者同士 同等の情熱を抱くが分ってみると 一方が常に他方ほどには愛していないのです。彼、もしくは彼女は、外科医でメスを振るっています 患者に、犠牲者に。

私は知っています 私がその犠牲者でしたから 尤も私は拷問者、外科医でもあったのですが。

聞こえますか あの大声の発作のような嘆息が？

誰かそれを洩らさなかった人がいました？愛し合っている間に。

誰かそれを曳き出さなかった人がいました？愛している相手から。

そのような騒音を「恍惚」と呼ぶのは神を冒瀆するもの 実際は一種の解体に属しているのであり、死に 身を委ねている時なのですから。我々は酔い痴れるのです お互い同士に、でも振りをしてはいけません、酔い痴れて 突然 死を物ともしなくなっているような振りは。

何故人々はそのそんなに誇らしく思うのだろうか 呪文で縛られてうっとりした

あの眼の表情を、あの 両脚の間が固くなるのを。

〈範例一〉、彼女が手を私の両脚に滑らせたので

遂に私はまるで息が詰まり縛りつけられたみたいと感じた。
〈範例二〉、彼女がもはや何ら喜びを与えてくれなくなつた、

それなのに私は彼女の裸の肢体からだに手を置いていた 殆ど何気なさそうに 私は身を乗り出して彼女の肢体からだを味

わい尽したので

遂に彼女の全身が 喜びの余り震えに震えた。

官能性⁽¹⁾とは残酷の親密な一形態であり

快樂は全て他者に身を売らせることになり

得るのです、私が君を愛する、すると私は君に身を売るこ
とになる

しかし私の寛大は君の好色な残酷なのです。

セックスは屈辱であり、ぞつとさせられる遊戯で、
そこでは一方が自制心を失うことになるのです。

問題が関わるのは所有権とか制禦であり

そのためにそれは抵抗し難い遊戯になるのです。

私はかつて次のような疑問が議論されるのを聞きました、

愛の最大の快樂はどこにあるのか。

私はその話題を大変楽しんで熟考しましたが

討議の全容には、うんざりさせられました、

或る人は言いました、我々はもつと高度な權力を愛すると。

或る者は言いました、与えることは受け取ることに優りま

す。

尤も別の人に言い返されましたが 私は受け取るほうがい
いと。

その場の誰にも やはり愛と權力とを結びつける者はいま

せんでした。

或る人は實際明言しました、最大の喜びは愛に

おいては、〈国家〉の人口に子供たちを与えることだと。

しかし我々は実のところ子供たちだけでなくてはならない
のか

喜びという話題を論じる時にはいつでも？

苦痛は、と私は言おう、快樂から分離できないし

愛は拷問の至高の形態に他ならないのだと。

君は私を必要とする、しかし私は松明を運ぶのだ 彼女を

求めて……

邪悪は快樂の全ての中に くるまれてくるのです。

訳注

(1) The erotic 性欲を掻き立てる「満足させる」こと。

この作品、八行詩七連から成る総計五六行の詩だが、ど
の連も、その行末語が、順に「A B B A C D D C」と使わ
れて韻を踏む仕組である。第一連をみてみよう。行末語は
第一行から第八行まで順に、pleasure, love, love, plea-

sure, torture, cynical, cynicism, torture' や 'cynical' 'cynicism' は関連語を使っているが、その他は同語を使用している。拙訳で各行中、傍線を施してある語が行末語である。同語でない場合は擬似韻、もしくは同韻異語が使われている。その例として他の連では、第三連——行目「嘆息」'sighs' と四行目「恍惚」'ecstasy' 同じ連の五行目「解体」'decomposition' と八行目「振り」'position' の異語押韻／第五連——行目と三行目は共に 'prostitute' で同語が正確に使われているが、前者は動詞、後者は名詞なので、拙訳では「身を売らせる」と「身を売ること」としたが、後者は「君の」男娼にしたいところである／第六連——行目「議論される」'discussed' と四行目「うんざり」'disgust' は異語で押韻させている。最終連の六行目と七行目は、「拷問」'torture' と「彼女を」'her' で押韻させていて絶妙である。この「講義集」は、全て形式上の技巧を凝らした連作だが、とにかく作品をどんだんみてゆこう。

二、ハインリヒ・ハイネ

ありがとう、ありがとう 淑女紳士の皆さん

私はここへ今日 我が身を運んできました
褥とこの墓(1)でも呼べそうなものに乗って
そこに私は何年もの間 埋葬されていたのでしたが
(お許しあれ この時起立しなくても)
性愛せいあいについて講義しようとしてです。

エロスについて語っている身障者として、
というのも私が長年諦めてきた主題なのですが
私は承知しています、私の状況は（この度たび
彼は遠くまで行き過ぎたのだ！）滑稽でしたし深刻だと。
しかしそれでもまだ私は 一廉の男らしくないだろうか？
ユダヤ人の眼などを備えていないだろうか？ 少なくとも今
日のところ。

私は人間喜劇じんげきにやみつきになつていたので
提案しましょう、あらゆる喜び、特に、愛は
フランス人とドイツ人との結婚けこんのようなもの
か さもなくば（空間）と（時間）との永遠の不和のよう
なものだと。

我々は皆 狂ったように墓の方へと這っているの

かさもなければ年月を越えて前方へと跳躍しているの

(私はと言えば、私は何年も跳躍できないできました)

そしてお辞儀をしているのです (時)の悪魔めいた殴打の下に。

我らの気分を紛らすものと言えば——紳士、淑女の皆さん
男と女の人々の間の輝かしい戦争だけなのです。

私は躊躇いませんよ、その闘争を「愛」と呼ぶことに。

私を御覧下さい、私の熱っぽい躰は墓からだなのです。

私は長いこと 褥の墓で生きてきましたので

殆ど人間に似てさえいないのです、

しかし私を存続させているのは、愛の探求なのです。

私は全盛期の日日を送ってきた犬なのかも知れません

(確かに長年続いた全盛期でした)

しかし私はまた 我らの時代の並はずれた一人の知識人であるので

皆さんに話してありますが、何ものも埋め合せは出来ません

(時)を

あるいは 墓の明白な忘却状態を

あるいは 長年月に及んで障害を引き起こす麻痺を

愛のいつもの魅惑以外には。

それが理由で、夜が昼日中を渴望し

神々が——天よ我らを助けたまえ——人類を羨望するのです。

淑女、紳士の皆さん、日日は年月へと進み

躰は時で一杯になった墓なのです。

我らは溺れています。我らを救うのは愛だけなのです。

訳注

(1) mattress grave 晩年のハイネが、病床で書き続けた、

「歴史」「悲痛」「ヘブライ旋律」の三部から成る物語詩集

『ロマンツェーロー』*Romanzero* (1851)の「あと書き」

で、彼が、パリのこの私の「褥の墓」(Matratzengruft)

には木の葉一枚落ちて来ない、と述べている、それへの

言及だろう。彼は一八四六年以来、「褥の墓」に葬られる

状態で呻吟しながら書き続けた。

(2) the marriage of the French and Germans ハイネは『聖

霊物語』などをフランス語とドイツ語で書いて、ドイツ

古来の文化を紹介し、独仏文化の架橋作業を行った。

この作品は、「セステイーナ」(sestina) 詩型で書かれる。六行詩六連に三行の追連 (envoy) が付く総計三九行の詩だが、六語の行末語をどの連にも定まった行に順に(その挙句第一連一行目の末語が第六連六行目の末語になる) 使用し、追連の三行にもその六語を各行末と行中に使う、甚だ凝った技巧の詩型。六語がこの三九行詩の中に各々七回使われる。

「ハインリヒ・ハイネ」では、第一連で使用される行末語は一行目から順に、gentlemen, today, 「grave, years, time, love, 正式にはこの六語が以後の第二連〜第六連にも各々既定の順で行末語として使用される筈であるが、変化形がこの詩では使用される。gentlemen は man, Germans, women, human/today は comedy, ladies, day/love は Eros が。grave (第二連四行目は「墓」の意味ではなく、形容詞「深刻な」), years, time はそのまま使われており、拙訳では傍線の語が行末語である。

三、マルキ・ド・サド「サド侯爵」

これは私が講義をした最初なのです
私の氣に入りの主題「愛の本質」について

だから有難いことです 勇敢にも私を招待して下さい。願わくは後悔なさらぬように、私を招いて下さったことを性愛について私が考えていることをお聞きになっても。これからお話するのは或る講義に向かつてゆく仮りの覚書として

と言うのも 私が準備してきたのは 或る観察群でそれを、許して下さいよ、私は証明しようとはしておらず 主観的な証言として提出するものなのです。

この証拠となる証言に対して私が要求するつもりなのは その決定的な正直さであり それを私には証明できません。私が皆さんに提供するものは 私の観察群の率直さで、

私は確信しています 皆さんに衝撃は与えないだろうと、過度には

(もしくは過少には) 底知れぬ深淵を暴き出すことによっても

愛の中心部に―目が回る程の核心に―在るものをです。我らは何を愛するにしても常にそれらを冒瀆しようとしません。

性的衝動は深淵の縁に立ち続けるのです、セックスは過度にまででないと十分ではないのです。

愛は好色なのです 甚だ危険なのだから。

私は完全な自由の唱道者であり 信じているのです

他の人々が存在するのは私の欲望を満足させるためだと。

私はあのような欲望を追求するのを恥しいとは思わずに

私の残酷な信念を実践するつもりなのです。

最高の関係は 常に危険なものです。

〈展示第一〉は、無垢な実例です。

私の姪には、恩寵によって後光の差す顔、

悪意のない魂、そして百合のように白い躰が備わっている。

私は好きです 彼女の躰じゅうを手で愛撫しまくって

彼女がお祈りをしている間に背後に入り込むのが。

彼女の屈辱ぶりは素晴らしい実例です。

〈展示第二〉は、教会で生じます。

私は従者に若い娼婦を買わせにやります

すると彼は彼女に優しい顔立ちの尼僧の装いをさせます。

（私がこれに何らかの良心の呵責を感じるかって？ 全然）
会衆席で私は恐れ戦くその娼婦に男色行為をして
遂に彼女は私の教会の一員になります。

欲望に忠実であるには勇気が要ります——

度胸のある人は多くはいません。私自身が糧を得るのは

快楽を求めてで、悪所の底からなのです

（そして私は彼女の臀部から快楽を得て満足しました）。

私は言いますよ 愛人のお尻から糧を得る

勇気のある人は誰でも 欲望を十分満たすだろうと。

どうぞ立ち去らないで下さい。私の信条は孤立主義で、

人間の間の接触欠除です。

しかし私の喉を絞めてごらん そうすれば私に触らせてあ

げる。

私の顔に唾を吐きかけてごらん そうすれば私を見せてあ

げる。

私の一物を吸ってごらん そうすれば一人の人間を味わえ

るのです。

そうでなければ我らは孤立主義の臣下ということになる。

許して下さい。もし私が余りにも自由^にに話していると
なら。

私は古風な自由思想家⁽⁶⁾以外の何者でもなくて
快樂の神聖さを信じているのです。

苦痛、もまた、快樂の気高い形態なのであり

自由思想家の奇妙な経過と同じです。

私はあなたがたを恐るべき自由へと解放してあげたいのだ。

訳注

- (1) liaisons (男女の) 密通、私通。
- (2) masturbate 手淫を行う、自慰「オナニー」をする。
- (3) enter behind = sodomize、鶏姦する。
- (4) sodomize 肛門性交をする。
- (5) a member of my church「サドの信仰者になる」意。
- (6) libertine 性的に束縛されない人。
- (7) strange 他の人々には馴染みのない。

この作品は、六行詩九連から成る総計五四行の詩で、ど
の連も行末語が「A B C C B A」の型に配列されて押韻す
る。第三連の「C」の「love」は「愛」と「愛する」で名
詞と動詞の違いがあるが、第四連の「B」は「believes」、

believes」で同じように動詞と名詞の違いである。第六連
の「C」は「num」「None」で、同音で押韻する全くの異
語でこれは出色の出来栄えと言えよう。サドの「語り」に
相応しい。第八連の「B」は「beings」「being」で、単数
形と複数形である。他は同語の使用で全く変化がない。

四、マーガレット・フラー

有難う。愛についてのこの会話に出席して下さい。

これから〈十九世紀〉に関わる議論をしましょう

女性にはもはや愛のために犠牲になることはあり得ません。

〈中世の時代〉は終わったのです、淑女、紳士の皆さん、

それでこれから〈十九世紀〉に関わる議論をしましょう

私たちは単なる妻でも娼婦でも、母親でもありません。

〈中世の時代〉は終わりました、紳士がた。淑女の皆さん、

私たちは今や海上の船長になれるのです、なりたければ。

私たちは単なる妻でも娼婦でも、母親でもありません。

私たちは弁護士にでも、医師にでも、ジャーナリストにも

なれるのです、

私たちは今や海上の船長になれるのです、なりたければ。
私たちに重要なのは 自分自身で達成することなのです。

私たちは弁護士にでも、医師にでも、ジャーナリストにも
なれて

自らを公式の規約に書き込めるのです。
私たちに重要なのは 自分自身で達成することなのです。
今やエウリュディケーがオルペウスを呼び求める時であり

自らを公式の規約に歌い込めるのです。

彼女はもはや相続にとつて他人ではないのです。
今やエウリュディケーがオルペウスを呼び求める時であり
大地を彼女の勝ち誇った歌で動かすのです。

彼女はもはや相続にとつて他人ではないのです、
彼女もまた、砂に自らの足跡を残します

そして大地を彼女の勝ち誇った歌で動かすのです。

神は私たちが創られたのです 幸福という目的のために。

彼女もまた、砂に自らの足跡を残します。

彼女もまた、自らの躰の中に神性を感じます。

神は私たちが創られたのです 幸福という目的のために。
彼女は婚約者でも花嫁でも配偶者でもありません。

彼女もまた、自らの躰の中に神性を感じます。

〈男性〉と〈女性〉とは各々一つの思考の半分ずつです。
彼女は婚約者でも花嫁でも配偶者でもありません。
両性は互いに予報し合うべきなのです。

〈男性〉と〈女性〉とは各々一つの思考の半分ずつです。

彼らは共に法の前では同等の関係にあります
両性は互いに予報し合うべきなのです。
私の愛する人は磔刑にされるわけにはいかない人です。

私たちは共に法の前では同等の関係にあります。

私たちの最も神聖な仕事は 大地を愛容させることです。
(私の愛する人は磔刑にされるわけにはいかない人です)

大地そのものは 天の一部分になるのです。

私たちの最も神聖な仕事は 大地を愛容させることです。

有難う 愛についてのこの会話に出席して下さって。
大地そのものは 天の一部分になるのです。
女性はもはや愛のために犠牲になることはあり得ません。

この作品、四行詩十一連の四四行から成るが、一読明瞭なように各行が二度ずつ使われるので実質二二行の詩で、第二連以降のどの連も一行目と三行目は、直前の連の二行目と四行目の詩行なのである。そして最終第十一連の二行目と四行目は、冒頭第一連の一行目と三行目が使用されて、「女性はもはや愛のために犠牲になることはあり得ないのだ」と高らかに詠い上げられる。今や神話にあるのは逆で、エウリュディケーがオルペウスを呼び求める時、だから反復行も一七行目は「書く」ではなく「歌う」と、さりげなく見事に変形される。

如何にもフェミニストの先駆者としての超絶主義哲学者
フラアの、颯爽たる風姿が浮上して鮮やかである。

五、ジャコモ・レオバルディ

有難う この新しい詩を聴きに来て下さって
レオバルディが機会に臨んで作ったものです。

彼は残念がっています ここで自分自身で朗読できなくて
(彼は、自分は自分自身の名残りにすぎないと、示唆して
います)、
特にこのような幸先の良い機会なのですから。

彼は私に頼んだのでした 皆さんにこの詩を示してくれと。

詩は神が存在するものなら神を讃える一つの方法となる

だろう Poetry Would Be a Way of Praising God

if God Existed

夜が深くしんしんと更けてゆく詩

私は冬時の とある丘に立つて

不吉な月を凝視していた。

私は恐ろしくなった 一つの間にか私自身

無の真只中において、私自身が 澄み切った

無の状態であるのに気付いたので、月のように。

私は時間の内部にいて息が詰って、

その空虚な夜に注意を凝らしていた

と その時 鐘が遠くで鳴り響いた

三度、心臓が鼓動しているように
空のこの上なく遙か彼方で。

その音楽には静けさが沁み通っていた。

私は立ったまま耳を傾けていた。その静けさに
空一面に満ち渡るように思えるまで。

あの月は心臓が鼓動しているようだった
どこか遙か遠く離れた所で。

しかし死にゆく惑星の群れる宇宙にあつては
限らない星々の空間には如何なる中心もない。

〈死〉だけがエロスの真物の母であり

唯、愛だけが大地を復活させられる。

地上を天蓋で覆っている空を見たまえ、

それはエロス不在のまま脈打っている黒い海であり、

限りなく死んだ 星々の空間から成る世界だ。

愛だけが我らの宇宙を取り戻せる。

レオパルデイの詩を当人に代って紹介するという体裁の
最初の口上の六行は、行末語が「A B C C B A」と二度ず
つ使用される。レオパルデイの詩とされる二四行の作品
は、行末語の配置が「A B C D D C B A」の型で三回反復

されている。拙訳の傍線語(句)が各行の行末語である。

六、ラルフ・ウォルドウ・エマソン

有難う 愛についてのこの講義に来て下さって。

私は言われて来たものです 公の談話だと

私は知的な談話を心底敬うせいで

愛の主題には無頓着になってしまふのだと、

しかし私はそのような非難の言葉にたじろぎそうです

私は愛がこの世界を創造したと信ずるからです。

他の何が、結局、この世界を永続させるのですか？

実践された愛以外に。私はあの言葉を味わいます。

愛の研究とは諸々の事実の問い直しであり、

諸々の夢の問題、重大な問題となる夢なのです。

愛する人々とは天上の諸問題を研究する科学者です

彼らの肉体がこの上なく甘美な諸々の事実を結びつけるの

ですが。

顔を赤らめたりしないで下さい 私が愛のことを

二つの独立した魂が再び結合することだと話しても

それらは誕生以来彷徨える魂として漂ってきたものが

今や永遠の愛となつて一緒に同行するのです。

自然に起こる共感がなくては愛は存在できません。

言いましょ、あなたは仕事で秀でる狩人だと

(確かにこれは全く私の仕事ではありません)

それで私には余り共感は起こりません。

しかしながら、言いましょ、あなたは朝お茶を喫み

朝食にアップルパイを食べたがります、

私たちは二人共、田園を非常に早い時刻に歩きながら

闇が早朝へと変つてゆくのを見詰めます

するとこういうことが私たちの間に相互の絆を創り出し

安息を魂を込めて共有するに到ります。

心は歓喜と安息を得ます、

火と燃える雷光が私たちの間を強打する時。

私はセックスの主題を避けたりはしません

それは、結局、宇宙の一つの原理なのです

(ああ、私の韻文の原理の一つでもあります)

私たちはセックスを通じて互いに結ばれるのですから。

御覧なさい、女の子らが男の子らと戯れている様子を

そのうち男の子らがゆっくり女の子らを取り巻きます。

村の店々は女の子らで込み合っています

うろろしながら、男の子らと何も話さないまま。

恋の気分は天上の恍惚の始まりであり

不滅の大はしゃぎ、浮かれ騒ぎの有り様です、

文明そのものが依存しています、その浮かれ騒ぎに

恍惚となつて我を忘れた状態のにです。

愛は明るい外国人であり、外国そのもので

私を本当の私であることで私と認めるに違いありません

私を愛する人しか、私があるがままに理解できないのです

私は私そのものを創造しようと腕いているのですから。

だから同じく、私はあなたを、本当のあなたである時に愛

する筈です――

で、それが何だつて？ 冷静な顔つきや

内気な外面、寄る年波の下で

あなたがあなたであるがままの若い情熱を私は感じ取るの

です。

愛する人は 何か表明することがあつてやってきました
そのような表明が愛の本質を確証するのです。

ここに、愛する人がその愛する相手に述べる事が生じます
情熱の熱を帯びて、私はこう表明します、

私のあなたへの愛は肉欲の世界であり

そこでは四季はきらびやかな祝祭として現れます。

私たちはこのとても愉快な祝祭に同席できません。

やうて来て私と横たわり その世界を貪りましょう。

八行詩七連、総計五六行のこの詩の、各連の行末語の配置構成は、いずれも「A B B A C D D C」型で、同語でな
くて押韻するものは、第三連の「D」―「breakfast」fast
「朝食」「早く」。第四連の「D」―「universe」verse「宇
宙」「韻文」。第六連の「D」―「visage」age「顔つき」
「年」、視覚韻である。第二連の「B」―全く同語の
「matters」だが、動詞と名詞の使い分け。

七、コレット

若い友人の皆さん、これが最後の講義です、
とは言つても最後の言葉ではありません、愛の主題では、

だからお聞き下さって感謝です。私には喜びです
何かしら知っている情熱を話しかけるのは

(それは、失礼、私が何かしらこれまでの全ての講義につ
いて言えることで)―単なる喜びだけでなく

私たちが愛だと表現する始末に負えない深みなのです。

私たちだけの内緒の、「或る現代講義」と呼ぶことにしま
しょう。

しよう。

私の母はよく言ったものです、「さあ、あなた、座って、

泣くんじゃないよ。女にとって最悪なのは

彼女の最初の男―あなたを殺す人なのよ。

その後で、結婚が長い経歴となるのよ」と。

気の毒なシド！彼女には決してもう一度の経歴はなかった

そして彼女は直に愛があなたを滅ぼす様を知ったのです。

誘惑者は自分の女を氣遣つたりしないのです、

甘い言葉を彼女の耳に囁きかける時でさえ。

誰にもあなたの内なる気概を決して破壊させないように。
あらゆる形の真底馬鹿気た勇氣の中でも

若い娘たちの無鉄砲ぶりは飛び抜けています。

そうでなければ結婚はもつと遙かに少なくなるでしょうし結婚を圧倒する情事はもつと少なくさえなりましょう。

私を見て下さい、驚くべきことですよ。私がまだしつかりしているのは

滑稽な勇気を振るって行動した後なのに。

私は苦しむ筈でした、が、誰も私の気概を挫きませんでしたよ。

女性には誰もが自分の冒険を御馳走にしたいのです

熟したサクランボや桃、マルセイユ無花果、

温室育ちの葡萄、クリスタルグラスの中で泡立ち震えるシ

ヤンパンが彩るような。

幸福は、思うに、贅を凝らした見せびらかしに基づきます。

しかし不幸は、それとは異なる類の出し物を書くのです。

ジブシーは澄んだ青いクリスタルグラスの中を凝つと窺き

こみ、腐ったサクランボや萎びた無花果を見ます。

信じて下さい、孤独、もまた、御馳走になり得るのです。

意気込みは結構ですが、自分自身の部屋は守りましょう。

私の夫たちの一人は言いました、不可能だよ

君が愛についてでない書物を書くなんて、
姦淫、近親相姦じみた関係、別居？

(勿論、これは私たちが別居する前でしたが)。

彼は決して理解しませんでした。愛の自然な法則を、
可能な事から不可能な事への弧を……

私は寢室の悲劇を褒め讃えたのでした。

私たちには最初の情熱の正確な描写が必要です、

だから自分に起きたことには何でも注意を払って下さい。

何事も全て観察すること。愛は強欲で忘れっぽいのです。

是非とも自分自身を激しく生命の中に投げ込むことです

(尤も時々は生命によって元へと投げ返されるでしょう)

それでも経験を積んでも忘れっぽくならないことですし

自分に起きるあらゆることに驚かないことです。

私たちは情熱によって燃料を与えられる創造力のある生き

物なのです。

これを愛に関する一連の講義の終章だと考えて下さい、

愛の本質についての若干の最終の思索です。

自由が愛の最初の条件であるべきですし

仕事は解放するものです（愛についての小説は愛の営みを行いながらでは書けません）。

決して過小評価してはなりません。愛の神秘を、愛について語らないことの顕著な気品を。

情熱を籠めて注意を払うことは祈りであり、祈りは愛なのです。

その世界を味わいましょう。愛情籠めてその御馳走を平げましょう。

この八行詩七連に駄目押しの一付き総計五七行の行末語構成は、第六連まで全て「A B C D D C B A」型で、同語でないのは、第二連の「A」―「tear, ear」（文脈上から前者を「あんた」などと拙訳したが、母親の助言を「耳」と正確な押韻語で合わせていて実に面白い）、第三連の「C」―「outstanding, standing」（各々「飛び抜けている」「しっかりとしている」と拙訳）、第四連の「D」―「display, play」（各々「見せびらかし」「出し物」と拙訳）、第五連の「A」―「room, bedroom」（各々「部屋」「寝室」）。それ以外は全て同語。尚、第一連の「D」は前置詞

の 'about' なので、その連の四、五行目の文脈で「何かしら」を訳語にしておいた。

第七連の八行と最終一行の行末語は全て「愛」 'love' で、最後に「愛」を九箇連ねて、この愛の「講義集」は締め括られるのである。

以上、形式にのみ若干注意しながら、そそくさと観てきた「愛に関する講義集」だが、これについても作者自身の言葉がある。作品掲載の件の『アメリカ最優秀詩選集』(1983)で、彼は、愛に関するシンポジウムを呼びかける決心をしたのだと言った。

「私が聞いてみたいと最も深く関心を抱いていた作家たちだけを招くことにした。我々が異なった時代に生きていることなどという事実には妨げられまいと思った。声の各々は親密なもので、公式には非難もされ、情容赦しない無情なまでに真正なものであろう。それは家庭の守護の神々を集めたものであり、一群の連禱と処理、浮き彫りと銘刻の祝祭、激情の資料の一揃い、高熱の歓喜、教訓の天国……となるだろう」。如何にも（詩人）の文章そのものである。

「知識の前に欲望、私はボードレールの『内面の日記』

からの衝撃的なある諷刺文を展開することから始めた。自分のマットレス墓から語りかけるハイネに移っていつて私は覚ったのだ。この〈講義〉の中には、愛の詩に変わってゆくものがあるのだ。その形式は賞讃の形式、熱を帯びた讚美歌になるだろう。突然私は帆走し出した、幸福へ向かって……」。我々は詩人と一緒に帆走するわけにはいかないで踏み留まることにして、まずボードレル（Charles Baudelaire, 1821-67）から。ハーシユの言う「衝撃的な諷刺文」は、『内面の日記』の余りにも有名な次の「火箭」三、である。

「愛の営みは拷問あるいは外科手術によく似ている……二人の恋人がすっかり夢中になり、相互の欲望ですっかり一杯になっているような時でも、かならず二人のうちの一方が、相手よりも冷静であるというか、憑かれている度合が低いものだ。この男、もしくはこの女が、手術者、もしくは刑吏である。もう一人は、患者、犠牲となる。破廉恥の悲劇の前奏をなす、あれらの溜息、あれらの呻き声、あれらの叫び、あれらの喘ぎがあなた方に聞えるだろうか？ そうした声を発しなかった者があるだろうか、逆うすべもなく吐き出させなかった者があるだろうか？……この種の

解体作用を呼ぶのに法悦の語を用いることは、瀆聖のわざであろう……恋愛の最大の快楽は何に存するかという問いの出たことがある。誰かが…受けることに、…他の一人は、自分を与えることに、…ある男は、自尊心の快楽……他の者は謙譲の逸楽……最後に恥知らずな改革空想家が…恋愛の最大の快楽は祖国のために市民を作り出すことである、と断言した。…恋愛の唯一至上の逸楽は、悪をなすのだという確信に存する。」（阿部良雄訳。…部、引用者の省略）

ハーシユの「ボードレル」は、「展開」などと言っているが、殆どこの名高い箇処の現代版の英詩化と看做してもよい程であろう。

次のハイネ（Heinrich Heine, 1797-1856）は、封建ドイツに反逆する自由思想の詩人、特に晩年十年は、彼自身の表現で有名になった「褥の墓」に葬られた状態で、病身に鞭打ちながら精力的に執筆活動をした姿は感銘深い。「人間に似てさえないない」彼を存続させている「愛の探求」を、ハーシユは、ハイネを（紗幕）にして形象化したものである。この事情は、最初のボードレルの場合から最後のコレットに到るまで同じであり、それが「愛に関する講義集」を筆者に今回取り上げさせた理由でもある。

尚、ハイネと言えば常に筆者に想起させる彼の名言がある。「書物が焼き払われる所では遂に人間も焼き払われる」。彼の若き日の戯曲『アルマンゾル』の中の科目である。

三番目は、今年丁度没後二百年になるサド侯爵 (Donatien Alphonse François, marquis de Sade, 1740-1814)。数々の性的スキャンダルと筆禍などで通算二八〇二九年間牢獄と精神病院での幽囚生活を送りながら良識を震撼させる数多くの作品を書き続けて二十世紀文学に強烈な影響を及ぼした破天荒極まりない文学者で「サディズム」の由来となったことは言うまでもない「エロティシズムを詩にまで高めた史上最初の文学者」(澁澤龍彦『サド侯爵の生涯』中公文庫、三三三頁)が登場して、「恐るべき自由へと解放してあげたい」と言ってくれるのが、このハーシユの詩。ハーシユもサドに親昵していることがよく窺える作品である。第三連の八行目で「セックスは過度にまでならないと十分ではない」^{of the} “Sex is not enough until it becomes too much.” と、宣っているが、サドの『新ジュステイヌ』*La Nouvelle Justine* (1797) の中の “Tout est bon quand il est excessif.” 「過度である時、全ては良い」を直ちに想起させよう。四番目に爽やかに現れるマーガレット・フラー (Sarah

Margaret Fuller, 1810-50) は、ホーンソンの『フライズデイル・ロマンス』のヒロイン、ゼノビア (Zenobia in *The Bithedale Romance*) のモデルとも看做されている、十九世紀前半のアメリカが生んだ最も優れた女流批評家、フェミニストの先駆者である。六番目に登場させられているエマソンを中心とする超越論者の拠点機関誌「ダイアル」*The Dial* の初代編集者として、ゲートなどのドイツ文学を紹介した。「ニューヨーク・トリビュン」紙の特派員として欧州を旅行、ローマに一時定住中に結婚し、一家で帰国の途中難船して夫と幼児共々溺死した。惜しんでも余りあるという常套句そのままの、享年四〇。この詩の力強い最終行「女性はや愛のために犠牲になることはあり得ません」が、いつまでも心に響き続けるだろう。

次の、ジャコモ・レオパルディ (Giacomo Leopardi, 1798-1837) は、卓抜な厭世詩人として世界に聞こえる、イタリアの伯爵家出自の詩人。少年期より父の図書館に籠って死に物狂いの猛勉強に没頭し、若年にして、ギリシャ語、ラテン語、英・仏語をマスターし、博識となったが、身体をこわし、三九歳で夭折した。

ハーシユの作品は、夜の静寂と得られぬ女性の愛を希求

する苦悩とが対比されるレオパルデイの詩「祭りの日の夕べ」に触発された詩か。

六番目は、「コンコードの哲人」(Sage of Concord)と讃えられた米国の思想家、詩人、随筆・評論家のエマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)。彼に、〈愛〉について「講義」させ、私と一緒に肉欲の世界(a voluptuous world)を貧ろう(denour)と「表明」させた功績(!)を讃えるだけに今は留めておこう。読者は改めて、このエマソンの代表的な論文「大霊」"The Over-Soul" (1841)や「自然」"Nature" (1844)を読み直すに違いない。

最後に締め括り飾るコレット(Gabrielle-Sidonie Colette, 1873-1954)は、申すまでもないがブルーストやジードも感嘆させたフランスの二十世紀前半の小説家で、ベルギー王立アカデミー会員やアカデミー・ゴンクール会員にも推挙された文学者、清新な感覚と奔放自在な想像力を発揮した心理作家にハーシユも魅了されたか。母親の影響が強いとされている生への熱情と肉欲が主題だとも評されたこの作家の特徴をよく捉えた詩だと思われる。『シド』Sidie (1929)は母親への思慕が籠められた佳作だった。

第三連の、結婚についての感想も、三度の結婚生活を経

験しているコレットならではのものとして興味深い。

以上の七篇、いずれ劣らぬ優れた作品で、七人の先人作家という〈紗幕〉を通しての、ハーシユの、愛への探求が表れていたのではなからうか。

エロスとタナトスは、対のような愛と死の神々であり概念である。本稿は、本誌前号の拙稿「死を讃えるドナルド・ホール」と、対の一篇のつもりである。

参考文献

ウエルギリウス『アエネーイス』泉井久之助訳(世界文学全集21・筑摩書房・一九六五)

オウイデイウス『転身物語』田中秀央・前田敬作訳(人文書院・一九七五)

『カタログ』『生誕二〇〇年ハインリヒ・ハイネ展』生涯と作品』編集代表 鈴木和子(丸善プラネット株式会社・一九九七)

澁澤龍彦『サド侯爵の生涯』(中公文庫・一九八三)

ジルベール・レリー『サド侯爵——その生涯と作品の研究』澁澤龍彦訳(筑摩書房・一九七〇)

ダンテ『神曲』地獄篇 平川祐弘訳(河出文庫・二〇〇八)

ホメロス『オデュッセイア』上・下 松平千秋訳（岩波文庫・一九九四）

呉 茂一『ギリシャ神話』上・下（新潮社・一九五六）

『ボードレール全集』VI 阿部良雄訳（筑摩書房・一九九三）

Germaine Beaumont et André Parinaud, *Colette* (Paris: Seuil, 1973)

Mehren, Joan von, *Minerva and the Muse: A Life of Margaret Fuller* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1994)

森田 孟「アメリカ現代詩の〈セステイーナ〉——その現状と意義(一)、(二)」(筑波大学文芸言語学系「文藝言語研究 文藝篇29・30」[31〜70・1〜84ページ]、一九九六)
拙訳の対訳付セステイーナ詩35篇を収録して考察した。

拙訳での〈へ〉付とゴチック体は、原詩では各々、個有名詞以外の大文字で始められる語(句)とイタリック体である。